

インターネット導入前と現在の女子大学の意識

山内 美恵子^{*} 小澤 あつみ^{**} 立花 厚子^{***}
 日本女子大学 ^{*}人間社会学部・コンピュータセンター兼務
^{**}理学部 ^{***}理学部・コンピュータセンター兼務

1. はじめに

情報化社会である現在において、学生はコンピュータをはじめとする情報機器を日常的に利用する機会が増加している。教育現場においても、コンピュータに対する学生の意識に徐々に変化が生じていると見受けられる。コンピュータリテラシー科目が必須となっている家政学部や文学部をはじめとして、情報教育の充実をめざしている大学教育現場として、学生の現在の意識を捉えて教育に生かすことが必要であると考え、学生の現状を把握することにした。

日本女子大学では、インターネットが導入されていない1991年にコンピュータの授業の履修に関わらず、学生に対して調査を実施し、コンピュータに対する意識15項目やコンピュータ関連用語である60用語に対する意識などの内容を集計した。2002年にその調査結果を基に、情報処理授業を履修している学生を調査し、1991年の調査結果と比較検討したので、その結果を報告する。

2. 調査について

2-1. 調査対象

1991年の調査は目白と西生田両キャンパスの学生403名に対して行ったが、今回の調査は2002年前期と後期の情報処理基礎9クラス359名と、情報処理基礎を終了し情報処理に関連した授業(以後応用クラス)を履修している3クラス107名に行い、その詳細を表1に示す。

2-2. 調査内容

調査は2002年4月と10月に行い、A4用紙1ページで、内容は主に個人環境とコンピュータに対して同意できる18項目の意識とコンピュータおよびインターネット関連用語71用語に対する意識の度合いなどである。

個人環境の内容は、コンピュータを学習し始めた時期、パソコン所有の有無、自宅でのインターネット接続の有無とメール・WWWの利用と頻度および携帯電話の所有とメール・WWWの利用と頻度、コンピュータ関連授業の履修やプログラミング経験、コンピュータ知識の満足度などである。

3. 結果および考察について

3-1. 情報環境

パソコン所有率・ネットワーク接続率・携帯電話の所有率を表1に示す。接続率は、パソコン所有者を対象にしている。パソコン所有率は1991年では平均30%以上であるが、2002年の基礎クラス全体では87%に近く、応用クラスでは95%以上であり、基礎クラスでは学部により多少差があるが、応用クラスでは差がないようである。その内、基礎クラスでは85%以上、応用クラスでは82%以上がインターネットに接続している。

携帯電話での所有率は、学部学科に関わらず95%以上であり、携帯電話で毎日メールを利用する割合は88%以上であるが、毎日WWWを利用す

表1 調査の対象人数・パソコン所有、ネットワーク接続、携帯電話所有の比率

学部	情報処理基礎クラス					情報処理応用クラス			
	家政学部	文学部	人間社会学部	理学部	基礎平均	人間社会学部	理学部	応用平均	
対象(名)	1991年	209		126	68	403	-	-	-
	2002年	63	41	163	92	359	23	84	107
パソコン所有(%)	1991年	41.00		30.70	35.29	31.42	-	-	-
	2002年	90.48	85.37	85.28	88.04	86.91	95.65	95.24	95.33
ネットワーク接続(%)	2002年	86.21	97.14	80.58	87.65	85.30	86.36	81.25	82.35
携帯電話所有(%)	2002年	100.00	97.56	96.91	95.65	97.21	95.65	98.80	98.11

Awareness in the women's university before the introduction of the Internet and at present
 Mieko Yamauchi, Atsumi Ozawa, Atsuko Tachibana: Japan Women's University

る割合は 20%弱である。また、基礎クラスのパソコンでのメールや WWW の利用は月 1 回以上が全く利用していないが半数以上を占めているが、応用クラスでは週 1 回以上が 70%を占めている。

大学で初めてコンピュータを学習した割合は 1991 年では 56.2%であるが、2002 年の基礎クラスで大学で初めて学習した割合は 15.6%である。中学校で初めて学習した割合は 39.1%で、大学入学以前に学習している割合は高くなっている。

3-2. コンピュータに対する意識

コンピュータに対する意識として同意するかどうかを問いた 18 項目の割合を図 1 に示す。

2002 年は、基礎クラスで大学で初めてコンピュータを学習した学生と大学入学前に学習した経験のある学生の割合を示している。後半の 3 項目は 2002 年に追加した項目である。全体的に 2002 年の割合が高く、特に「社会に役立っている・就職するとき必要・楽しいもの・卒論で必要・家庭生活で必要」の項目においては、1991 年より 2002 年で同意する割合が非常に高くなり、コンピュータの必要性をより感じているようである。

2002 年では、大学入学前に学習した経験のある学生の方が同意する割合が高い意識項目が殆どであるが、「使えなくてもよい・使えないと生活に支障」の 2 項目だけが低く、今は使えないが使いたいという要望があるようである。

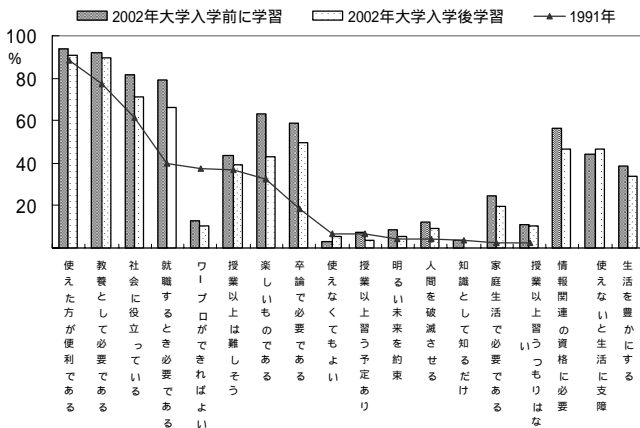


図 1 1991 年と 2002 年のコンピュータに対する意識の割合

3-3. コンピュータ関連用語に対する意識

1991 年の「知っている」関連用語の割合と 2002 年に調査した 60 用語の意識の割合を図 2 に示す。意識は、「知っている」「なんとなく知っている」「知らない」の 3 段階から上 2 段階の割合の合計である。図 1 と同様に、2002 年は基礎

クラスでの大学入学前のコンピュータの学習経験別での割合を示している。

関連用語では、2002 年は 1991 年より知っている意識が全体に高い。1991 年の方が知っている意識の高い用語は、「パソコン通信・コマンド・バイト、ビット・コンパイラ・ブレイク・インターフェイス・VAN・RS-232C」であり、現在使われなくなりつつある。しかし、「アイコン・クリック・スクロール・起動・ウィンドウ」など Windows 環境で利用する用語や「パケット・ISDN・ログオフ・チャット・ログイン・リンク・ダウンロード・電子メール・パスワード」などネットワーク環境で使う用語は、2002 年の方が非常に高くなっている。ネットワーク環境も充実し、Windows パソコンが主流を占めており、環境の変化に伴い意識も変わっているようである。

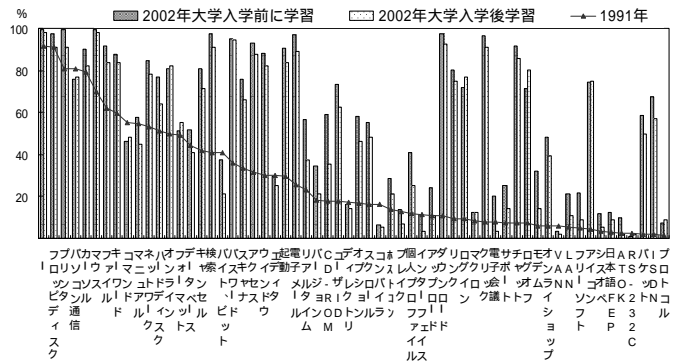


図 2 1991 年と 2002 年のコンピュータ関連用語に対する意識の割合

4. まとめ

2002 年は 1991 年よりパソコンの所有率は非常に高く、日常生活で利用機会も多く、コンピュータに対する意識から社会生活の必要性を認めているが、一般的な基本操作でよい意識が見受けられる。コンピュータ関連用語は 2002 年が「知っている」意識は高く、1991 年の割合が高い用語は現在では使われにくい用語のようである。

コンピュータなどの情報処理に対して学生の意識は年々変化しており、授業の内容やツールとしての効果的な利用などさらに検討していかなくてはならないと感じる。

【参考文献】

立花厚子他: Analysis of the Effective Use of Electric Mail, 日本女子大学紀要理学部第 3 号(1995)
立花厚子, 山内美恵子: 女子学生のコンピュータに対する意識の変化 - 1991 年と 2002 年の比較 -, 私立大学情報教育協会平成 14 年度大学情報化全国大会発表予稿集 (Sep. 2002)